



ファーストラン!

FIRST RUN!

—多くの仲間とともに現在を変え未来を創造するために—

NO.102
2017.7



『海の中』^{みやぎゆうな} 宮城柚那 氏

特集

近藤陽成 in the KAKIBA

カエルのうた
パンのみみ



■ CONTENTS ■

3 近藤陽成 in the KAKIBA

ー黒田征太郎ワークショップにに行ってきましたー

20 カエルのうた

21 パンのみみ

ファーストラン！電子版もあります

当法人公式 Web サイト内のページにアクセスしてください。フルカラー PDF 形式でご覧いただけます。ルビなし版も。

<http://www.suisinkyō.com/first-run>

「夏がやってくる」

当法人の居宅サービス事業に勤務して、はや三ヶ月が過ぎました。

研修もあと一ヶ月、実習と職務も同時に進行しているので、講習や講義で教わったことがすぐに実感出来て、自然に研修課題と就業実務双方に興味がわいてきます。

ことさら、居宅支援による実践では基本はあっても正解は様々。日によって、気分によって、自身の受け止め方によって、利用者側と支援者側の関わり方に変化がおこるところは貴重な経験です。

田植えを終えた田んぼを見渡す初夏の坂道を電動自転車こぎながら「さあ、今日もドタバタドラマの幕は開いた、どんな展開があるのかな？」と心の中で少しスリルにも似た感覚になり、信号変わって勇気を出そうと思い切りペダルを踏んだら、勢い出過ぎて冷や汗に。「まずは慎重に！」と今日も始まった。(岡部 ^{おかべ} 文乃 ^{あやの}：ヘルパー派遣事業職員)

近藤陽成 in the KAKIBA

ー黒田征太郎ワークショップにいつてきましたー



「(うおーっ、すごい！絵で会話してる！)」

さっき観たばかりの絵が目の前でどんどん姿を変えていきます。

「こんなんでもう？」

「おー！」

黒田さんが描きあがった絵を見せたところ、陽成さんが両手で大きく「〇」を作り元気に応えました。

ギャラリー ^{か き ば} KAKIBA との出会い

^{こんどうようせい}近藤陽成さんは笑顔の絶えない20代の青年です。陽成さんは言葉を話すことは苦手ですが、相づちや表情、マカトンサイン（簡易的な手話の一種）を使って人に気持ちを伝えることができます。絵を描くことも好きで、職場の休憩時間にもいろいろ描いていたようです。

陽成さんは仕事休みの週末、障害のある人の外出を支援する「ガイドヘルパー」として当会で活動している^{おかだひょうご}岡田兵吾さんと数多くの場所に出掛けます。その行き先の1つが心斎橋 BIGSTEP にあるギャラリー「KAKIBA」。毎月のように通うようになり2年目になります。今回はそのKAKIBAで作品を発表している作家、^{くろだせいたろう}黒田征太郎さんのワークショップ「絵話教室」に陽成さんが行くと聞き、足を運ぶことにしたのでした。

私は普段、陽成さんのガイドヘルパー派遣の担当者をしているので、KAKIBAに通い始めた時のことを岡田さんから聞いていました。「黒田征太郎さんと陽成さんが意気投合して一緒に絵を描き、帰りぎわに握手とハグで大喜びの一日になりました」とのこと。それから毎月のようにKAKIBAに行くようになり、「熱心に通っているなあ」と毎回話を聞いていたのですが……。一年ほど経った頃、岡田さんからとうとう「KAKIBAで『ようせい展』をやることになりました」ということを聞くにいたり、「なんだかよく分からないけど、どうやらユカイなことに発展している！」と認識せざるをえませんでした。「これは足を運ぶしかないでしょう！」と思いたち、自分の目で確かめてみることにしたのでした。そんなわけで実際にKAKIBAに通う陽成さんを目にしたのはこの日が初めてのことです。

4月末日、天候にも恵まれ晴天です。心斎橋 BIGSTEP の大階段に、用意された大量の段ボールと画材、大勢の大人と子どもが集まりました。そこに黒田征太郎さんが登場、段ボールに描いたり切り貼りして……ものの数分で素敵なゾウができました。「あまり自分がこういうこと言いすぎるのもなんですが……。今って色んなものがものすごいスピードで捨てられてると思うんです。このままだとヤバイなあと思うんですね。そんな世の中なんで大人として子ども達にイロイロ伝えなくちゃいけないことがあるなあ。それで今日は普段『ゴミ』になることが多い段ボールを使って何かみんなで作ろうと思ったわけなんです。今日は皆さん好きに描いてってください」



描きたい人が、描きたいように

ワークショップがはじまりました。大階段に所狭しと集まった大人と子どもが、その場に用意された段ボールや画材を使ってどんどん作品を作っていきます。「なんだろう」と足を止めて見物していく人や、途中から参加する人も大勢いて、現場はものすごい活気に。大階段の踊り場がみるみるうちに大量の作品に埋め尽くされていきます。そんな中、陽成さんも岡田さんと協力してダンボールに絵を描いていました。



BIGSTEP の大階段が人と画材と段ボールで埋め尽くされて、すごいことになってます。陽成さんと岡田さんも楽しそう



はじめて私が陽成さんに会ったのは彼が支援学校（普通学級でいうところの高校にあたります）を卒業する間際のことでしたが、その頃は「やさしく繊細な少年」という印象を受けていました。照れ屋で怖がりなところもあったように記憶しています。陽成さんが日頃働いているのは一般社団法人ぐりーん&ぐりーんが運営するお花屋さん。最初の頃は軒先での仕事にバテがちな時もあったようで、慣れない環境にストレスも多少あったようです。そんな陽成さんが職場にもすっかり慣れた頃、通い始めたのが KAKIBA でした。もともとは岡田さんのご家族にあてて、ギャラリー運営会社のスタッフの方からプレオープンの招待状が届き、陽成さんと岡田さんが足を運んでみたのがきっかけでした。たまたまそこで黒田さんが絵を描いており「描いてみるかい？」とのお誘いに陽成さんが乗ってみた、というのが始まりです。

月日も経ち、陽成さんも少しずつ様子が違ってきました。お店の軒先で道行く人と挨拶をしているうちに、多くの方々と仲良くなっているようで、「いつの間にお店の近所の人と仲良くなってるの!？」というような光景をたびたび見かけます。「フレンドリーな青年」になってきたような。



ワークショップは、最初に少し様子見の雰囲気があったものの、一度描きだしたら皆さん止まらないのか夢中になって手を動かしていました。そうこうしていると楽しい時間もあっという間。最後に黒田さんが言いました。

「最初はまだ自分が見て回って手伝えることも考えてたんですけど、できたら自分が手を出さないでいる方がいいなと思ってたんです。だから皆さんが好きなようにドンドン描いたり作ったりしてくれて今日は本当に良かったです！何回もこの場所で色んなことやらせていただいたんですけど、今日僕は凄くリラックスしていて楽しかったです。皆さん今日はありがとうございました。ありがとう、子どもたち。またやろうね。イエーイ！」

黒田さんの叫びに大勢が拍手で応える中、ワークショップは大盛況に終わりました。

描きたい人が描きたいようにのびのびとやれる場で、とても心地のいい空間になっていました。

絵で話す

会場の熱がまだ少し残る中、ギャラリー内で陽成さんと黒田さんが話しているところにもお邪魔してきました。

陽成さんは黒田さんに会う時、黒田さんが一部ドローイングをした紙をもらって帰ります。そのドローイングから発想して自分でまた絵を描き、次に会う時、見てもらっています。



黒田さんに会った時にもらった絵に、陽成さんが感じたものを描きくわえ、持っていきます



「見えました。ここにこの色で描いてもいい？」

黒田さんが陽成さんとやりとりしながら更に手を加えていきます。

「これは顔だな、これはカキだな」

黒田さんが絵のことを話すたび、陽成さんは嬉しそうに返します。やりとりそのもの楽しいようです。

黒田さんが手を止めると素敵な作品が4つ、できあがりしました。

「こんなんどう？」

「おー！」



陽成さん「(まるっ)」



黒田さんから陽成さんに渡った絵は、また陽成さんから黒田さんの元へ。二人のやりとりの結果、こんな絵に

文通ならぬ「画通」をこんな感じで陽成さんは続けています。

今はこうして表現することに慣れたようにも見える陽成さんですが、最初はずっと違ったものを描いていて、昔より随分とダイナミックに描くようになってきたようです。「描くものが全く変わった」と岡田さんは言います。

長年にわたり陽成さんのガイドヘルパーとして活動している岡田さんにうかがいました。

ー陽成さんと黒田さんの絵の会話は独特ですね。

「独特ですね」

ー通い始めから今まで見てきて、どういう印象がありますか。

「私にはよく分からないこともしょっちゅうあるけど（笑）、陽成さんと黒田さんの間では通じてるものがあるらしくて。黒田さんは『分かる』って言うんですね」

ーその辺は二人だけの感覚ですね。

「なんだかそういうのがあるんだろうなと思いますね」

ー描くものが変わってきてるということでした。

「変わってきてますね。明らかに最初描いてたものとは全然違います」

ーどう変わってます？

「最初は小さいものとかが多くておとなしかったけど、今は紙いっぱい描いてますね」

ー大胆になったんですね。



一緒に描いたり、壁に描いたり……。描いた点数も相当な数になってきているとか（岡田さん提供の過去の写真）

「大きく表現するようになったんでしょうね。最初はもっと控えめだったから」

—相当積み重ねがあって、そうなったと。

「今は家で思い立った時にサッと描いてしまうそうですよ」

—時間をかけてじっくり、という感じではないんですね。

「時間を長くかけて描く、というのはしないみたいですね。とにかく直感、短時間で描くみたい」

—自己表現というか、自分の気持ちを自ら伝えるというか。以前はもう少し苦手だった印象なんです。

「昔はそういうところもありましたね」

—絵で感情をどう表現するか、というのに慣れてきてるのかも。

「そうかもしれませんね」

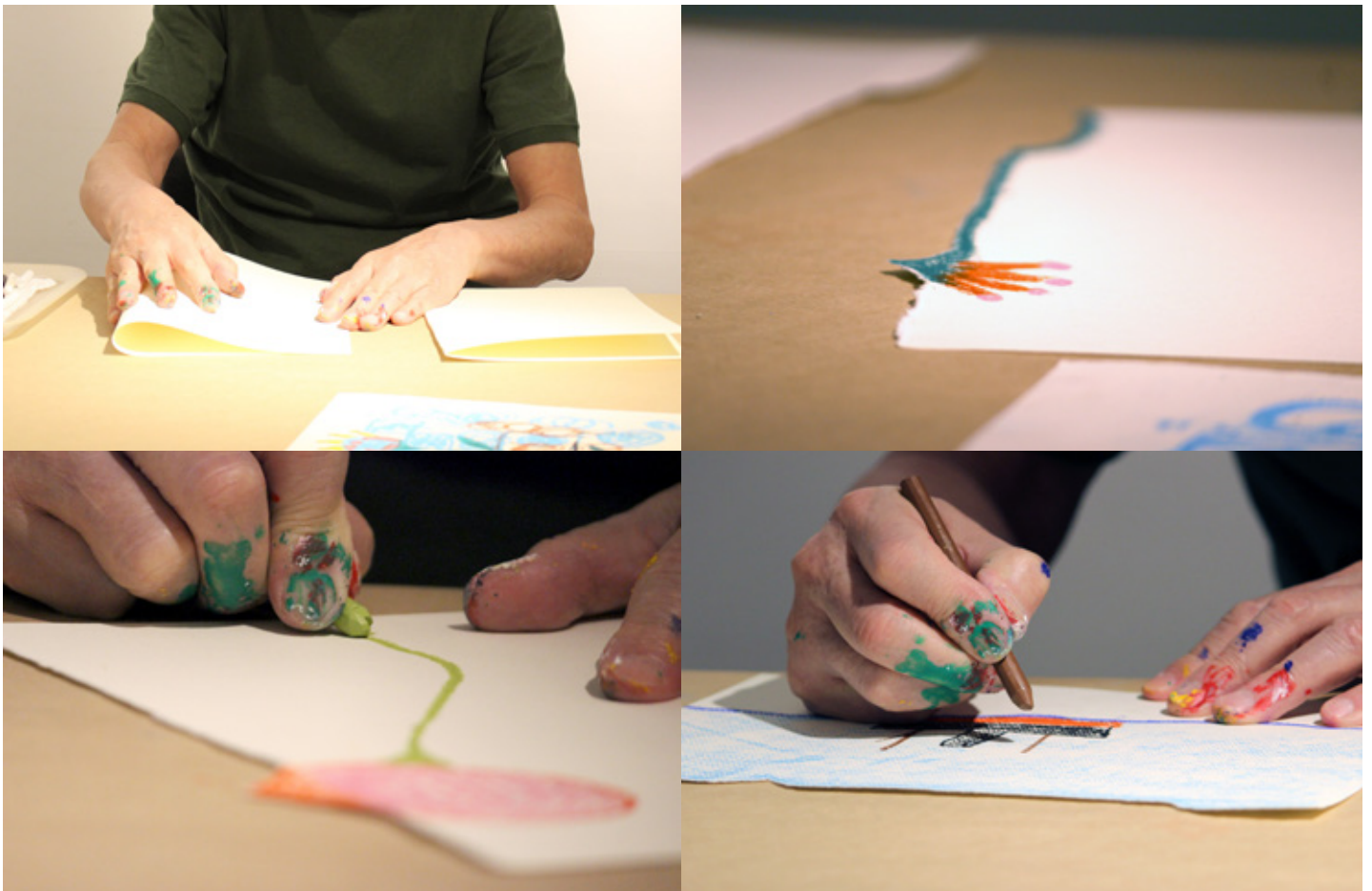
—どういうものを描いて持っていくことが多いですか？

「物なのか心境なのか、分からないので、陽成さんに聞いて教えてもらってますね。『花』が多いかなあ」

—長く時間をかけて大きい作品を描いても楽しそうですね！

「陽成さんが描くかどうかは分からないけど、これから描くようになるかもしれないですね。黒田さんも『急にできるようになるんじゃないか』って言ってましたね」

黒田さんがまた新しい「宿題」を用意しようと画用紙を手で破りました。



紙を折って、破って、描いて……そうしてできあがった黒田さんの絵から発想を得て、陽成さんもまた絵を描きます

「今のはうまく破れなくて失敗。だけど失敗を失敗と思わない」

と陽成さんに語りかけながら黒田さんが描くと、破り跡は海になったり、花になったり……。陽成さんは黒田さんのメッセージを受けて、次にどんな絵をそこに描くのでしょうか。

絵本来の描き方

黒田さんに今回のワークショップについてお話をうかがいました。

「あまり僕からお話しできることなんてないと思うけど……」と言いつつ、優しく語っていただきました。



BIGSTEP の地下 2 階にギャラリー KAKIBA があります

ーさきほどのワークショップは「自分が見に行かなくても皆さん好きに描いてくれた」ということでした。実際、皆さん夢中になって絵を描いていて、本当にいい場になっているなと思いました。最初は皆さん「どうやったらいいのかな」とかいう様子見な雰囲気でしたけど。

「そうそうそう……」

ー皆さん始めてみたらどんどん没頭していってましたね。本当に好きに自由に描いていて。

「あえて言えばあれが『絵本来の描き方』なんだと思います。あとはちょっと背中を押せばいい」

ー絵本来の描き方。

「たとえばお絵かき教室とか。お金持ちの人が、高価な絵の具や道具を買ったりして『それで描いたこの絵はいいものだ！』とか『こう描かなくちゃいけない』とか、そういうのも世の中にはあると思うんですけど。そういうのは、ね。絵の神様が見てたら怒ってますよ、たぶん。ねーっ」

「(陽成さん) 笑」



KAKIBA ではこの日も、黒田さんのドローイングやアクリルによる作品が多数展示されていました



黒田さんは今回のワークショップ以外にも多数の展示やライブペインティングなど、精力的に活動されています

ー皆さんワイワイやってて素晴らしい場になってました。

「今日はやって良かったですね。ものすごく沢山のものが、消費されては捨てられて。とにかくこのままいっちゃうとヤバイんじゃないか、みたいな気持ちがあって。あんまり僕がこうやって言いすぎるのもよくないと思うんですけど、『運動』みたいになっちゃうのも、なんか違うじゃないですか。それもあんまり好きじゃないんですよ」

ー「今日作った物を持って帰って、何年か持ち続けたらやがて宝物になる」というようなことをワークショップでおっしゃっていました。

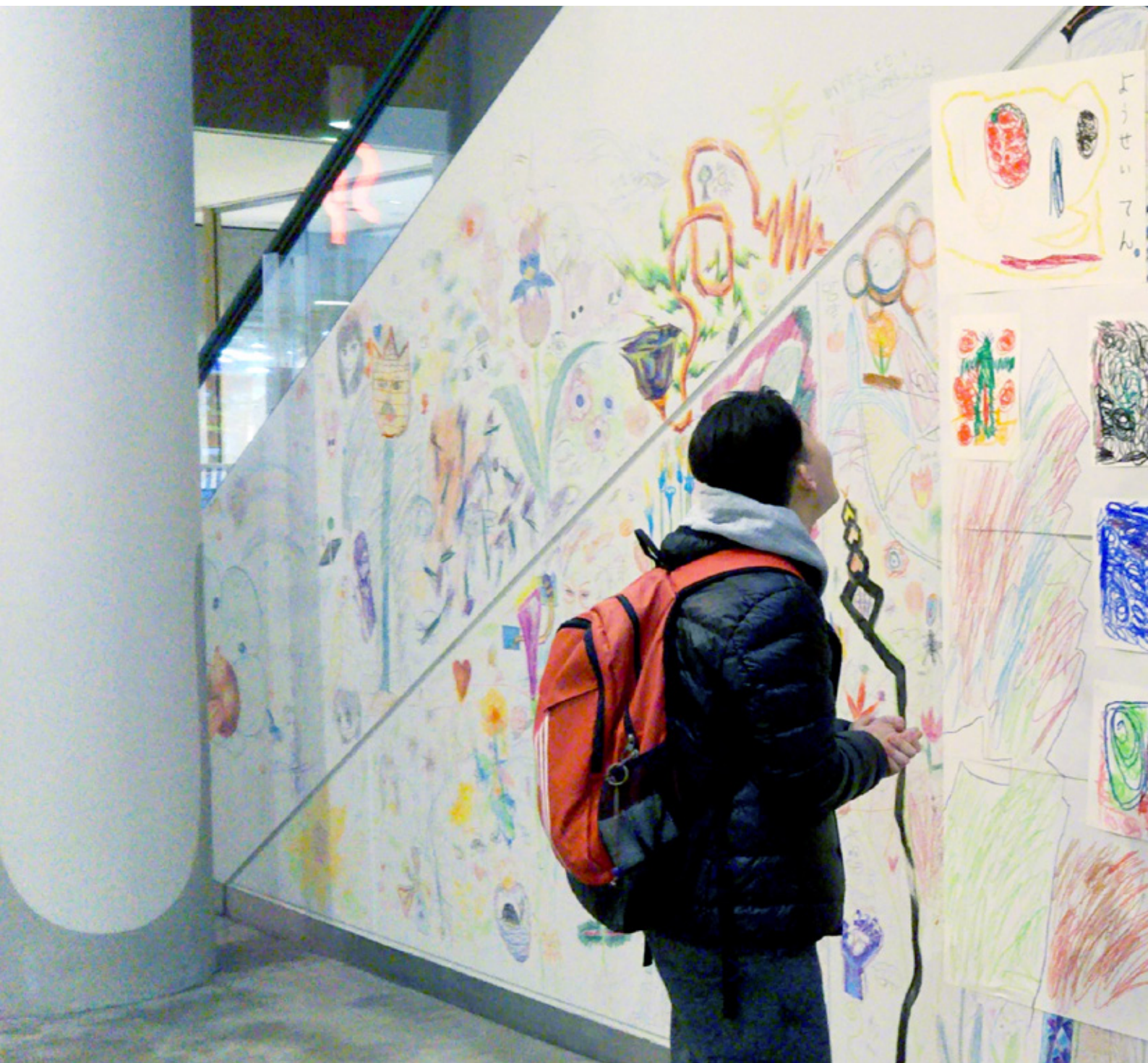


「この靴なんかもそうですよね。ずっと普通に使っていて汚れてるだけだけど、見方によってはキレイだっていう」
ーむっちゃキレイですね。

「『この靴並べて作品だ！』っていうのをやろうかと考えたことがあるんだけど、人から『ください』って言われるたびにあげてたのでほとんどなくなっちゃった」

ー（笑）

黒田さんの「とにかく何のものにもとらわれず、自由に描くんだ」という想いが強く感じられます。



近藤陽成×黒田征太郎、貸し借りなし。

陽成さんとの交流について黒田さんにうかがいました。

「彼とは知り合って2年目になるけど。僕は大阪にいない時も多いんです、でももう今はギャラリーに来るたびに『今日は陽成君来てる？』って聞くようになってますね」

「陽成さんも黒田さんのようなエネルギッシュな方と会って、たくさん刺激を受けているように感じます。『そうですか？僕はね、こう言うとよく人から意外だと思われるみたいなんですけど。社交的な人間ではないんですよ。パーティーとかも大嫌いな。いつも端の方にいっちゃう。でもこういう場所で描いたり話させてもらえる機会もあって。今日なんか目の前の大階段に大勢、自分が知らない人たちがいてましたね。そんな中に僕が知ってる陽成君がいてくれてるっていうのは、本当に頼りなんですよ」

「(陽成さん) 笑」

「ほんと、そうなんですよ」



今年2月の『ようせい展』開催時の様子。KAKIBAの向かいの壁画スペースで展示していました

—陽成さんが黒田さんともギャラリーの方々とも、すっかり仲良くなっていてとても驚きました。
「彼とはずいぶん親しくなってるけど、それは間に『描く』という行為があるからです。『描く』ということの前では、年齢とかそれぞれがもっている特性なんかは邪魔をしない。上手とか下手とか、言い出したらいロイロあるんでしょうけど、僕はそれ、思わない。描こうとする気持ちこそがすごく大事だと僕は思います。」
—彼は引っ込み思案なところも過去しばしばあったようにも感じていたんですが、最近は色んな方と交流してどんどん仲良くなっていって。より明るくなってきたような気がします。
「それをやるのが良いとか悪いとかではないと思いますよ。ただ、『人は一人では生きられない』ってことだと思います」

「僕は家から4、5日出てこないこともあるんですよ。ずっと絵を描いてる。そこだけ見たら『ウツのジジイかな?』みたいなことになりますよ。それだけじゃ分からないじゃないですか。でもそれは僕にとって大事な時間で。スッカラカンになったらダメですから。その大事な時間でチャージをして、それからなんにもおせっかいとかじゃなく、彼や、沢山の人に会う、っていうことをやってて」

「僕も彼と会ったら得してるし、彼も僕と会ったら得してるとかいうことだと思うんです。だから、貸し借りなしの関係ですよ。ね?」

「(陽成さん) おう!」

ー (一同爆笑)

「『してあげてる』なんて考えてたら続かないですよ。彼とはそういう関係ですね」



青年はこれからどんな絵を描くか

黒田さんと絵のやりとりをしている陽成さんにどんな変化があったのでしょうか。お母さんからもこれまでのことや、KAKIBAに行くようになってからの話を聞きました。

ー仕事を始めたり KAKIBA に行くようになってから何か変化ってありますか?

「家ではほとんど昔と変わらないんです。変わってなくて。でも外には知らない陽成がいるみたいです。」

ー外で自分の居場所がどんどんできてきているみたいですね。

「そうみたいです。周囲の方々に恵まれてると思っています」

ー『ようせい展』もあったと聞いてます。

「なんだか話がどんどん大きくなって」

ー黒田さんともギャラリーのスタッフの方々とも、ビックリするくらい仲良しになられてました。

「ギャラリーにいる皆さんに本当によくしていただいて私もビックリしてます」

ーご家族から陽成さんを見ていて「これからこうなって欲しい」というようなものってありますか?

「そうですね……たとえば職場の方が退職するとか、悲しいことがあったりすると、ガマンしちゃうみたいなんです」

ーガマン。

「はい」

ー普通に見かけているだけだと、分からないですね。

「そうですね。なんだか『笑って済ませちゃえ』みたいなものがあるみたいで。嫌なことや悲しいことがある時は『嫌だ』とか『悲しい』とか言ってもいいよ、と伝えてるんですけど。自分からそういう気持ちを伝えるのは苦手みたいで」

ー自分の気持ちに折り合いをつける、みたいなことでしょうか？

「そうですね。ついニコニコしちゃうみたいなので」

ー「楽しい」とか「嬉しい」、とかいう気持ちを、人に伝えるのはよくされてます、昔より随分と自己表現をするようになったと。自分でプラスの気持ちを伝えられるようになってこられたのでは。

「それはあるのかもしれないですね」

ー職場や KAKIBA でもいろいろ感じとっているみたいです。「自分が良い感情を相手に渡すと、良い感情が自分に返ってくる」みたいなのを実感されているフシがあると思います。

「はい、職場とか KAKIBA でいろんな経験をさせてもらっているからじゃないかなと。本当にありがたいことで」

「陽成」という名前があらわすように、彼は人生を朗らかに歩んでいる途上なのかもしれません。



ガイドヘルパーの岡田さんとお出かけ中の一幕。普段からいろんな場所へ行ってます

陽成さんにも少しお話を聞いてみました。

ー陽成さんが KAKIBA に行くのが大好きだというのがよく分かりました。黒田さんとかギャラリーの人たちとも超仲良くなってますし。

「うん」

ー絵を描くのも前よりもっと好きになってきたんじゃないですか。

「(うなづく)」

ー職場で仕事して、休みの日はあちこち出掛けたり、絵を描いたり、充実してますね。

「うん！」

ーエンジョイ？

「？」

ー「楽しい？」ってこと。

「うん！（ニコッ）」

ということで安定の陽成スマイルです。いろいろな人と打ち解けてしまえるのが凄みだと思います。「彼は『もってる』な！」と KAKIBA でいろんな方と和やかに交流している陽成さんを見て感じました。自分や周囲が明るい気持ちでいられるように、マイナスな感情をつい遠ざけてしまうようなところがあるようですが、それもこれからの陽成さんの表現次第です。絵で伝えたりすることもあるのかも。でも、直接伝えられなくても、プラスな感情をもっと大きくしてマイナスなんて気にもしない、そんな人生の描き方があっていいのかもしれません。よく描き、よく働き、よく遊び……絵や仕事、多くの場所への外出を通して陽成さんは今後も沢山のことを人を通じて得ていくに違いありません。笑顔を絶やさず、周囲の誰とでも仲良くなれてしまうスゴイ男、それが陽成さんなんだと私は思っています！



『ようせい展』開催中の KAKIBA で岡田さんと



黒田征太郎

1939 大阪生まれ
 1961 早川良雄デザイン事務所に勤務
 1969 長友啓典と K2 設立
 ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ受賞
 1985 科学万博サントリー館壁画制作
 1987 ポーランド国立ポスター博物館ポスター展
 日本グラフィック展「1987 年間作家賞」受賞
 1992 北海道新千歳空港壁画
 1994 『野坂昭如 / 戦争童話集』映像化プロジェクト開始
 1997 「8 日間 LIVE in KOBE」神戸・長田区久二塚空地
 1998 パラリンピック開会ポスター制作
 2004 『戦争童話集～風になったお母さん～』ピーボディー賞受賞
 2004 年より PIKADON プロジェクトを展開中。
 2007 BERLIN LIVE 2008 上海 40 日間制作 展示 (JING ART)
 2009 H.P. FRANCE rooms オープニングイベントポスター LIVE (表参道ヒルズ)
 『ヒロシマ・ナガサキ議定書を読む絵本』出版
 2010 ノーベル平和賞受賞サミットポスターを広島市民と制作
 2011 3.11 震災後、神戸・大阪・盛岡・南三陸町・小倉にてポスター LIVE
 (売上金全額寄付)
 宮城県・福島県内仮設住宅の壁画制作・瓦礫 LIVE・絵話教室を現在まで実施 「瓦
 礫・KOPPA プロジェクト」
 2012 『火の話』『水の話』『土の話』(石風社) 出版
 『怒る犬 MAD DOGS』(岩波書店) 出版
 2013 「戦争童話集原画展」(北九州市立文学館)
 2014 『火を熾す』映像化プロジェクト開始
 2015 『教えてください。野坂さん』(スイッチ・パブリッシング) 出版
 『小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話』(世界文化社) 出版
 2016 大阪アメリカ村 BIGSTEP にギャラリー&アトリエ「KAKIBA」をオープン
 また、多数国内外でライブペインティング・壁画制作・絵話教室・ホスピタルア
 ート等、幅広く活動されています。

黒田征太郎 ギャラリー & アトリエ 「KAKIBA」

「大阪ミナミ・アメリカ村を新しいアートの発信拠点
 としたい。」そんな願いを込めてつくられた黒田征太
 郎さんの制作活動の場 (アトリエ) 兼、ギャラリー。「絵
 画やアートに興味のある若者、子供たちとの共同生活
 の場でもありたい」との想いをもち運営されています。
 黒田さんの作品の展示や、ワークショップ等の多くの
 イベントも開催されています。今回のワークショップ
 に参加していた方々も、黒田さんと楽しく絵を描いて
 交流していました。ぜひ皆さんも足を運んでみてくだ
 さい。

〒 542-0086

大阪市中央区西心斎橋 1 丁目 6 番 14 号

心斎橋 BIG STEP B2

地下鉄御堂筋線心斎橋駅・7 番出口から徒歩 3 分

地下鉄四ツ橋線四ツ橋駅・5 番出口から徒歩 3 分

定休日 / 火・水曜日

開廊時間 / 11:00 ~ 20:00

Tel / (06) 6125-5549

Mail / info@ku-kakiba.jp

Official site / <http://ku-kakiba.jp/>

Facebook / <https://www.facebook.com/kurodaseitaro/>

取材協力：近藤陽成さんとお母さん

黒田征太郎さん KAKIBA スタッフの皆様

岡田兵吾さん

写真提供：岡田兵吾さん

撮影・本文：坊野一乗

カエルのうた

其の 16 ～あっ、星が光ってる



私が25才ぐらいの頃、障害を持った友人と自分たちの職場を作ろうとしていた。私たちが職種として始めたのが粉石けんの販売。その時に借りた事務所は家賃3万円の古民家で、住宅を借りるお金の無かった私は事務所で寝泊まりしていた。その古民家はよくこんな家が残っていたなと驚くほどボロボロで、隙間風吹きまくりだった。今考えればよくあんな所に住んでいたなと自分で感心してしまう。冬場など食べ残しを台所に置いておいたりしたら、朝には凍っていたこともある。冷蔵庫に入れておくと凍らないで済む。嘘のように思われそうだが本当のことだ。

その事務所には色々な思い出がある。私は二畳ぐらいのスペースの所で寝ていた。ある夜、寝ながら天井の角を見ると穴があいていて、よく見ると空の星が光っている。これは寒い訳だ。そのことにしばらく気がつかなかった私も私だが、そんなぼろい家を貸すなんて、なんという大家だ。とは言うものの当時は今以上に差別的な空気が流れていて、障害者関係の人に家を貸すなんてあり得ない時代だった。そういう意味では、そんなボロボロの家で、そんな大家だったから借りられたのかも知れない。

その頃、石けんの販売だけではかなり苦しかったので、大阪の梅田や千里中央まで行きカンパ活動をやっていた。その時の障害者メンバーは二人で、どうもインパクトが弱く、なかなかカンパが集まらなかった。私は協力してくれる障害者はいないかと、障害者メンバーに尋ねた。すると友人に在るとのことだったので、かなり遠方の障害者施設に入っている知人に協力してもらうことになった。それからその彼とは週に一度、カンパ活動の度に出会うようになる。そして数ヶ月経った頃、彼は施設を出て自立することになった。かなりの数の不動産屋を回ったが、重度障害者の彼に家を貸してくれる人はいなかった。仕方なく彼は私の寝ている部屋で暮らすことになり、自立第一夜を私と過ごすことになった。場所が狭く、布団も一組しかないのので、彼と私は1つ布団で寝ることになった。その日ふと目を覚ますと寝返りをした私に掛け布団を引っ張られ、彼は布団をかぶらずに寝ていた。その時の彼の言葉「悲惨やな～」が30数年経った今も頭に焼き付いている。

むとう よしかず
(武藤 芳和)

パンのみみ

その 31 ～ たのしい摩擦 ～



雨のなか、一人カッパを着て駅に向かっていった。介助者とは現地待ち合わせ、目に雨が飛び込んできてぱちぱちさせながら右折したその瞬間、バーッ！ ガリガリガリ、、、聞いてはいけない音がして、真っ青になる。再度、恐る恐る進んでみたけれど、ガリガリ～「こりゃダメだ、誰かに見てもらわないと」あたりを見回すが、人が通らない。少しすると一人の男性が歩いてくる。近づいてくるとわかる見た目は、60歳前後で厳ついメガネをかけ、金キラ腕時計の手には大金が入っているような大型バックを抱えている。車いすにのっている人とは対極の世界にいるような強面のおっちゃん。「す、す、すみません！ タイヤなにかおかしくなってませんか？」追いつめられて叫んでいた。訝しそうにこちらを見つめるおっちゃん、体を屈めバリバリに割れたスマホを「これか」と差し出してくれた。「キャあーっ、どうしよー!？」予想外の事態にあたふたしていると「どうすんねんッ!!」と、おっちゃんの野太い声がかぶさってくる。我に返り「膝の上に置いてください…」と説明し、お礼を伝えて一件落着、のハズだった。

まだ気持ちがそわそわしている。彼が去ってから駅に向かおうと決めていたが、なんともゆっくりな足取り。だんだん間がつまり尾行しているような変な絵になってしまった。追いぬくしかないと思腹を括り、もう一度大きな声で「ありがとうございました!」と言って走り去る後ろで、「んー」言葉になっていないような音が聞こえる。その時なぜか心に「よっしゃー!」ガッツポーズが浮かんた。何事もないければ変わらなかったであろうおっちゃんとわたし。彼は、わたしの HELP に応え困っている状況から救ってくれた。わたしが持っている偏見を露わにした。彼はどんな気持ちなんだろう。良いことをしたなと感じているのかな。障害者というカテゴリーに偏見をもっているんだろうか。この一件で何か変化はあるのだろうか。鮮やかにいろんな思いが廻った。

いい出会いだった。自分のなかに「そつなく過ごしたい」という思いが、異様に強く沁みついていることを気づかせてくれた。暮らしのなかでの引っかけり“お店に入れない”“予定時刻の電車に乗れない”“その日に出かけられない”などがありすぎて、事前に準備しておこう、安全な方にしよう、とガチガチの守りに入っていた。用意周到になりすぎて、本当は大切な『人との摩擦』まで失ってきていたんじゃないかな。躓くことが多いとしおれてしまうけど、わたしたちが住んでいる街はやさしい。もっとのびやかに過ごしたい、強く思った。摩擦のなかには、とてつもない可能性が潜んでいるものだから。

それ以降、困ったりすることがあると目の前の人に声をかけ、そこで生まれるやり取りを楽しんでいる。けれど、どうしても人当たりのよさそうな人や綺麗な人に声をかけてしまうんだね。これも人のさがというもの。

いまい まさこ
(今井 雅子)



当法人の応援をお願いします！【会員募集】

当法人「箕面市障害者の生活と労働推進協議会」（略して推進協）は「障害者市民の権利および自立生活の促進」を理念に掲げ、活動しています。当法人を応援してくださる会員を募集しています！

現在、当法人では主に下記の活動を行っています。



ヘルパー派遣事業

地域で自立生活を営む障害のある方々に向けたヘルパー派遣を行っています。「居宅介護」や「重度訪問介護」などの在宅支援、障害の特性にあわせた「同行援護」「移動支援」などのガイド支援を行っています。



グループホーム事業

障害者市民の自立生活の一つとしてグループホームを市内で運営し、地域生活を支援しています。入居者の自主性を大切にし、その人の個性をよく見てできることは自分でしてもらい、できないことは少しずつできるように世話人が支援をしています。



地域交流センター事業

放課後、長期休暇中の活動保障として障害がある子どもや地域周辺の子どもたち、および市民が交流する場「さんかくひろば」を運営しています。また、保護者等に対する相談も行っています。



相談支援事業

障害者市民の自立生活への援助・アドバイス・情報提供を目的として、きめ細かい相談業務を行います。また、より多くの市民と共に将来の施策のあり方について検討を行います。



その他の幅広い活動

当法人独自の事業として移動困難者の支援を行う送迎サービス、当広報誌『ファーストラン！』の刊行、ヘルパー養成の研修やアートサークルの運営なども行っています。

今後も障害のある方々にとって暮らしやすい社会づくりにむけた活動を継続していきます。より一層のご支援・ご協力をいただきますようお願い申し上げます。つきましては、**一人でも多くの皆さまに、当法人理念および活動方針の賛同者であり応援者でもある「会員」になっていただき、当法人の活動を応援していただければと願っています。**



■ご入会について■

入会希望の方はご一報ください。入会申込書を送付いたします。会員の種別は下記の3種類となっています。

団体会員	年会費	： 1 口	10,000 円
個人正会員	年会費	： 1 口	3,000 円
個人賛助会員	年会費	： 1 口	1,000 円

※団体会員・個人正会員は年に1回開催される総会に参加でき、議決権があります。個人賛助会員に議決権はありません。

また、団体会員と個人正会員の議決権は1つで、口数には比例しません。

(口数が増えても議決権は増えません)。

当法人公式サイトからお申し込みいただけます！下記のページにアクセスしていただき、画面の案内にそって必要事項を入力のうえ、お申し込みください。

<http://www.suisinkyo.com/members>

■お問い合わせ先■

072 - 723 - 3342 (会員担当：木下^{きのした})

みなさん、推進協の応援団、会員になってください！お願いします！

当法人について

当法人は箕面市内で様々な活動を行っています。

ご依頼・ご相談は電話・FAX・Email・公式サイトよりお問い合わせのうえ、各事務所へお越しください。



編集・発行／特定非営利活動法人 箕面市障害者の生活と労働推進協議会

〒562-0001 大阪府箕面市箕面4丁目8番30号 電話：072-723-3342 FAX：072-723-6506

Email：JDW07270@nifty.com 郵便振替：00990-4-116066 公式ウェブサイト：<http://www.suisinkyo.com>